2022 年度個別研究「ローカル地図製作等による地域の魅力再認識の可能性」報告書

『谷根千』から学ぶ地域ブランドの作り方

2023 年 3 月

公益財団法人 福岡アジア都市研究所
担当：山田美里

目次

はじめに 5

1. 谷根千とは 6
1.1. 地域雑誌の通称名から地域名へ広がった経緯 6
1.1.1. 地域雑誌『谷中・根津・千駄木』 6
1.1.2. 「谷根千」という通称の広がり 7
1.1.3. 地域雑誌『谷根千』の活動の認知 12
1.1.4. 現在の「谷根千」の使われ方 13
1.2. 「谷根千」の人気エリア化の状況 16
1.2.1. 観光客数 16
1.2.2. 商店街の賑わい 18
1.2.3. メディアでの言及 20
1.2.4. 住民の記憶 21
1.2.5. プロジェクトとプレイヤー 21

2. 『谷根千』ムーブメントの要因 27
2.1. 人 27
2.2. 内容（名称、クオリティ、双方向のコミュニケーション、販路） 28
2.2.1. 名称 28
2.2.2. クオリティ 28
2.2.3. 双方向のコミュニケーション 29
2.2.4. 販路 29
2.3. マスメディアと観光 31
2.4. 地域活動 34

3. 注目すべき論点 36
3.1. 周囲の理解と協力 36
3.2. プライバシーの保護と情報発信のバランス 36
3.3. 自治体の関わり方 36

4. ムーブメントの起こし方への示唆 38
4.1. 地域の一員として参画 38
4.2. 多様な地域活動の実施 38
4.3. 共感できる内容の発信 38

5. おわりに 39

参考文献 41

はじめに

研究テーマ：

ローカル地図製作による地域の魅力再認識の可能性

研究の背景：

新型コロナウイルス感染症が蔓延する前、福岡市の入込観光客数は年々増加し、2019 年には過去最高の 2,148 万人と推計されていた(1)。近年は、商業施設以外においても観光客が楽しめるまちにしていくために、福岡市やまちづくり団体による様々な取り組みが進められている。例えば、博多旧市街プロジェクト（2017 年開始）、一人一花スプリングフェス（2011 年開始）、きらめき通り歩行者天国（2014 年開始）、公開空地活用、Park-PFI（都市公園における公募設置管理制度）など都心を回遊してもらう様々な施策が導入されたことにより、都心への来街者をもてなす効果を発揮していると考えられる。しかし、買物や飲食の他に見所がないという認識は今でも市民の間で根強く残っている。

このような認識は、福岡市に観光資源が本当にないのではなく、観光資源としての価値が市民によって認識されていないことが考えられる。東京の人気観光地の一つ「谷根千（ヤネセン）」は、住民が発行した季刊誌『地域雑誌　谷中・根津・千駄木』によってまちの魅力が発掘、発信され、やがて全国的な知名度を誇る地域ブランドとなった事例であり、ベンチマークとして研究する価値があると考えられる。本研究では、「谷根千」地域における地域ブランドの形成過程を整理し、福岡市のように観光名所が乏しいと市民が思っている都市においても地域の魅力が再認識され地域への愛着が醸成される方策や可能性のヒントとなり得る要因について考察する。

研究の目的：

福岡市の地域の魅力が市民やメディアに認知され、ブランドとして形成される方策や可能性を、「谷根千」の事例から見出し、整理すること。

研究の方法：

- 文献調査
- インタビュー調査

1. 谷根千とは

1.1. 地域雑誌の通称名から地域名へ広がった経緯

1.1.1. 地域雑誌『谷中・根津・千駄木』

地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（以降、『谷根千』）は、1984 年から 2009 年までの 25 年間に計 94 号が刊行された A5 版の季刊誌である。東京都文京区の「根津」、「千駄木」、台東区の「谷中」、荒川区の「西日暮里」、北区の「田端」エリアを生活圏とする(2)、仰木ひろみ氏、森まゆみ氏、山崎範子氏の三人が、「江戸の寛永寺の創建に始まる 350 年を超える地域の歴史を掘り起こし、聞き書きという手法で『記憶を記録に変える』」(3)ことを目的として創刊した。

図 1 『地域雑誌　谷中・根津・千駄木』の写真

出所：『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』第 20 号、第 23 号、第 33 号、第 34 号、第 50 号、第 61 号、第 62 号、第 63 号、第 80 号、第 89 号を著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

1984 年 10 月『谷根千』創刊号の発行部数はわずか 1,000 部であったが、創刊から 4 年後頃には発行した 1 万部が一年で完売するようになり、その後も安定的に 1 万部を販売できていた。しかしながら、『谷根千』編集者らは、地域でのネットワーク力、影響力の高まりが、権力構造に繋がりかねないことを危惧し、「読者や町の人との人間的な関係を大事に」するため、1992 年の夏（『谷根千』第 32 号発行前後）に、発行部数を 8,000 部に減らし再販はしないこととした(4)。その後 15 年以上にわたり合計約 60 号を発行し続けてきていたが、販売部数は徐々に減り、2009 年 8 月に終刊した。

2009 年終刊後は、2000 年 6 月に開設されたホームページ上で、バックナンバーの在庫状

況のお知らせや、絶版となった第 1 号〜10 号の本文テキスト掲載、情報発信などの活動が継続されている。2022 年 10 月には全 94 巻が別冊 17 巻とともにデジタル化され、電子復刻版として販売され始めた[5]。

1.1.2. 「谷根千」という通称の広がり

① 雑誌名

「谷根千」という地域名は、1984 年に地域雑誌『谷根千』が創刊されるまで存在しなかった[6]。誌名の「谷中・根津・千駄木」が長いため、編集者たちや地域の人たちが縮めて呼び始めたのが始まり[3]であるが、活字として初めて世に出たのは、同年 10 月 15 日発行の創刊号「其の一　菊まつり特集号」の裏表紙に掲載された、「地域雑誌『谷中・根津・千駄木』」の紹介文の中である。そこには、「『谷根千』は池之端、桜木、向ヶ丘、日暮里など周辺部も含め、この街に住む方方（原文ママ）、いいお店、史跡、古い町並、年中行事などをテッテイ的に取材、ご紹介します。」[7]と書かれてある。

新聞紙上初めて「谷根千」という言葉が使われたのは、『谷根千』の英語版（図 2）が発行された時で、1987 年 10 月 26 日朝日新聞夕刊の「ジョルダン・サンドさん　下町ミニコミ英語版（人きのうきょう）」と題した記事に、「東京の下町の活気が伝わってくる英文雑誌「Ｙａｎｅｓｅｎ」創刊号がこのほど刷り上がった。谷中、根津、千駄木の頭をとった題名。」とあり、同記事に「地域の隔月誌『谷根千』」の言及も見られる[8]。

また、1987 年 11 月 27 日東京読売新聞朝刊の「季刊タウン誌『谷中・根津・千駄木』」が路地を調査し特集記事を組んだことを紹介する記事にも、「「谷根千」（やねせん）の愛称がすっかり定着したようだ。」とあり[9]、創刊からわずか 3 年で、雑誌の通称名が人々に認知されていたことがうかがえる。

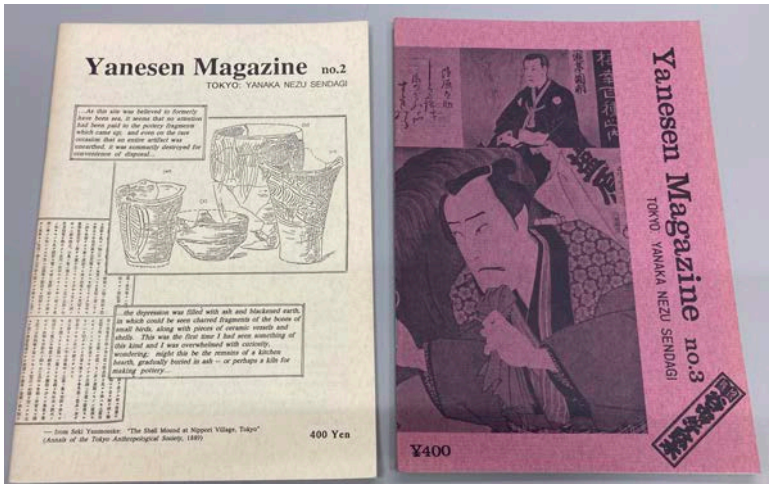

図 2　『Yanesen』（英語版　地域雑誌『谷根千』 No.2、No.3）の写真

出所：英語版『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』、著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

② 編集者名（屋号）

『谷根千』第 3 号・初版（1985 年 3 月発行）のクレジット欄に、「発行=谷根千工房（編集室トライアングル改め）」と書かれ、発行人の屋号が「トライアングル」から「谷根千工房」へ変わった。「谷根千工房」と印字し始めたのは第 3 号からで、その経緯について仰木ひろみ氏は、「雑誌を置いてくれている方達が『谷根千さんが来たよ』と言っていたから、「谷根千工房」にしてしまおう、となった」と話す(10)。

第 3 号以降、クレジットには毎号「谷根千工房」が印字されるようになった。初版では「編集室トライアングル」であった創刊号と第 2 号も、のちに増刷される際に、「谷根千工房」と印字されている。また、1986 年 5 月 5 日には有限会社として法人化され、会社名「谷根千工房」が公的にも登録された(11)(12)。

表 1　屋号表記の変遷

号	版	発行日	屋号表記
1号	一	昭和59（1984）年10月15日	編集室トライアングル
2号	一	昭和59（1984）年12月15日	編集室トライアングル
3号	一	昭和60（1985）年03月15日	発行=谷根千工房（編集室トライアングル改め）
2号	三	昭和60（1985）年05月25日	発行=谷根千工房（編集室トライアングル改め）
1号	五	昭和60（1985）年09月20日	編集室トライアングル
3号	三	昭和60（1985）年09月20日	発行　谷根千（やねせん）工房（編集室トライアングル改め）
6号	一	昭和60（1985）年12月15日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
5号	二	昭和61（1986）年02月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
7号	一	昭和61（1986）年03月15日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
8号	一	昭和61（1986）年06月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
1号	七	昭和61（1986）年08月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
9号	一	昭和61（1986）年09月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
10号	一	昭和61（1986）年12月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）
		⋮	
		⋮	
1号	八	昭和63（1988）年02月20日	発行　谷根千工房（やねせんこうぼう）

出所：『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』奥付をもとに著者作成

『谷根千』第 3 号以降、読者からのお便りを紹介するページが設けられるようになり、第 3 号 p.27 に、「元気な谷根千のご活躍をお祈りします（後略）」というコメントが紹介されているが、これは第 2 号制作前に編集者たちが会いに行った東京藝術大学の前野嶌先生から

のお便りと思われ、関係者の間で既に、雑誌名だけでなく編集者たちをも「谷根千」と呼ぶことが習慣化していたと推察する。『谷根千』第 8 号（1986 年 6 月 20 日発行）p.35 にも、「谷根千の皆さんが動いている！！」、「谷根千さん、ありがとう」と、テレビ映像に映る編集者たちに呼びかけるようなコメントが読者からあり、明らかに編集者たちを意味している。

一方、読者からのお便りの中で、雑誌名としての「谷根千」の使われ方が多い傾向は変わらず、例えば「谷根千を読みながら」（『谷根千』6 号 p.38）、「『谷根千』のバックナンバー」（同 8 号 p.34）、「『谷根千』を持って」（同 13 号 p.38）、「『谷根千』の話題」（同 17 号 p.38）、「谷根千を自分で買った」（同 18 号 p.38）、「谷根千は教材です」（同 20 号 p.37）、「店先で谷根千を拝見」（同 22 号 p.39）、「谷根千で得たことはあまりにも多すぎます」（同 94 号 p.87）など、最終号の第 94 号に至るまでこの傾向は続く。

③ エリア名

創刊から 2 ヶ月後に発行された『谷根千』第 2 号（1984 年 12 月）に、「谷根千マップ」と題した、森まゆみ氏による手描き地図が見開きで掲載されている。この地図に、名所旧跡や誌面の特集記事で取り上げた銭湯の位置とともに、『谷根千』の販売店が「『谷根千』のおいてある所」としてプロットされている。

同号には、「谷根千湯屋めぐり」と題し、台東区の「谷中」、「池之端」、文京区の「根津」、「千駄木」地域に所在する 15 軒の銭湯が紹介されている。「谷根千マップ」は、エリア名としての「谷根千」であると読み取れるが、「谷根千湯屋めぐり」は、エリア名としての「谷根千」か、または地域雑誌『谷根千』を冠として用いているのか、判断が難しい。

表 2 に、創刊から約 2 年の間に発行された『谷根千』第 2 号～10 号で「谷根千」が含まれる言い回しを抽出し（「読者からのお便り」を除く。）、その略称が、雑誌、編集者、エリアのどれを指しているのか、分類を試みた。冠として「谷根千」が使われている場合、例えば「谷根千情報トピックス」は、空間範囲を示しているように思えるものの、内容は「谷根千工房」に関するものもあり、両方の意味を含むと分類した。また、号が増すにつれ、誌面で「谷根千」が使われる場合は、エリアを指すことが増えているという傾向がみえる。

評論家の田中直毅氏は、週刊『エコノミスト』の記事のなかで、「谷根千と一括されるこの地域が、新しいイメージをまとい始めた[13]」と記し、同記事が発行された 1985 年 10 月の時点で、人々にエリア名として認識され始めていることがわかる。また、『谷根千』第 20 号（1989 年 7 月発行）前後から、誌面で紹介される読者からのお便りに、エリア名としての「谷根千」の使い方が見られ始めた。例えば、「独特の谷根千なまりの声」（『谷根千』17 号 p.39）「谷根千附近」（同 18 号 p.38）「谷根千地域」（同 19 号 p.45）「谷根千の町」（同 20 号 p.39）「谷根千地区」（同 27 号 p.46）などである。しかし、雑誌名としての「谷根千」ほ

ど多く使われてはいない。それは、お便りを書く人が『谷根千』の読者であることが理由と考えられる。

表 2　地域雑誌『谷根千』に掲載される「谷根千」

言い回し	雑誌	編集者	エリア	号	年	月	P.	分野	種類
地図谷根千マップ			○	2	昭和59（1984）	12	1	目次	題名
谷根千・村だより		○					1	目次	題名
谷根千湯屋めぐり			○				3	特集	題名
谷根千マップ			○				30	地図	題名
谷根千のおいてある所	○						31	地図	印の説明
やねせんむらだより		○					32	編集後記	題名（欄外）
谷根千マップ			○	3	昭和59（1985）	3	1	目次	題名
谷根千マップ			○				16	地図	題名
谷根千のおいてあるところ	○						17	地図	印の説明
谷根千マップ			○	4	昭和60（1985）	6	1	目次	題名
谷根千の甘一い生活　昔気質の和菓子屋さん			○				4	特集	題名
谷根千マップ			○				16	地図	題名
谷根千のおいてあるところ	○						17	地図	印の説明
谷根千味のグランプリ　本当においしいお店	○		○				28	記事	題名
「谷根千第一回井戸端学校」			○				29	情報トピックス	会合名
「谷根千 ― 生活を記録する会」			○				29	情報トピックス	会合名
谷根千マップ			○	5	昭和60（1985）	9	1	目次	題名
鴎外の愛した街・谷根千　森さんのおじさんと散歩しよ！			○				2	特集	題名
谷根千マップ			○				16	地図	題名
谷根千のおいてあるところ	○						17	地図	印の説明
谷根千味のグランプリ　本当においしいお店	○		○				26	記事	題名
「谷根千の生活を記録する会」			○				30	情報トピックス	会合名
谷根千秋の催し物ガイド			○				30	情報トピックス	題名
谷根千マップ			○	6	昭和60（1985）	12	1	目次	題名
谷根千酒屋全リスト			○				16	特集資料	題名
谷根千の風景			○				17	コーナー	題名
谷根千マップ			○				20	地図	題名
谷根千のおいてあるところ	○						21	地図	印の説明
資料　明治の新聞に表はれたる谷根千附近			○				31	資料	題名
谷根千情報トピックス		○	○				37	コーナー	題名
谷根千ちず			○	7	昭和61（1986）	3	1	目次	題名
谷根千のおいてあるところ	○						17	地図	印の説明
谷根千の風景			○				24	コーナー	題名
「谷根千・生活を記録する会」			○				29	情報トピックス	会合名
谷根千ちず			○	8	昭和61（1986）	6	1	目次	題名
谷根千・円朝めぐり			○				12	記事	題名
●印は谷根千の買えるところです	○						18	地図	印の説明
谷根千の風景			○				27	コーナー	題名
谷根千味のグランプリ　本当においしいお店	○		○				30	記事	題名
「上野・谷根千研究会」			○				33	情報トピックス	会合名
谷根千路上観察			○	9	昭和61（1986）	9	17	ギャラリー	題名
●印は谷根千の買えるところです	○						18	地図	印の説明
「上野・谷根千研究会」			○				32	情報トピックス	会合名
「谷根千自然散策」			○				33	情報トピックス	会合名
「谷根千生活を記録する会」			○				33	情報トピックス	会合名
この町に手作りの豆腐屋二十軒、谷根千の住民でよかった！			○	10	昭和61（1986）	12	1	目次	キャッチコピー
谷根千ちず			○				1	目次	題名
谷根千・手作り豆腐の買える店全リスト			○				11	資料	題名
谷根千の風景			○				17	コーナー	題名
●印は谷根千の買えるところです	○						18	地図	印の説明
谷根千の新名所／日暮里・本行寺			○				20	コーナー	題名

出所：『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』第 2 号～10 号の誌面をもとに著者作成

図 3 は、日本経済新聞社が提供するオンラインデータベース「日経テレコン」で 1984 年～2021 年における、新聞、雑誌、テレビ[1]、企業情報などのメディアを対象として「谷根千」「谷中 and 根津 and 千駄木」「YANESEN」をそれぞれ検索した結果である。1985 年頃から、「地域雑誌　谷中・根津・千駄木」が、1987 年頃から「谷根千」が地域雑誌の略称として新聞で使われるようになった。

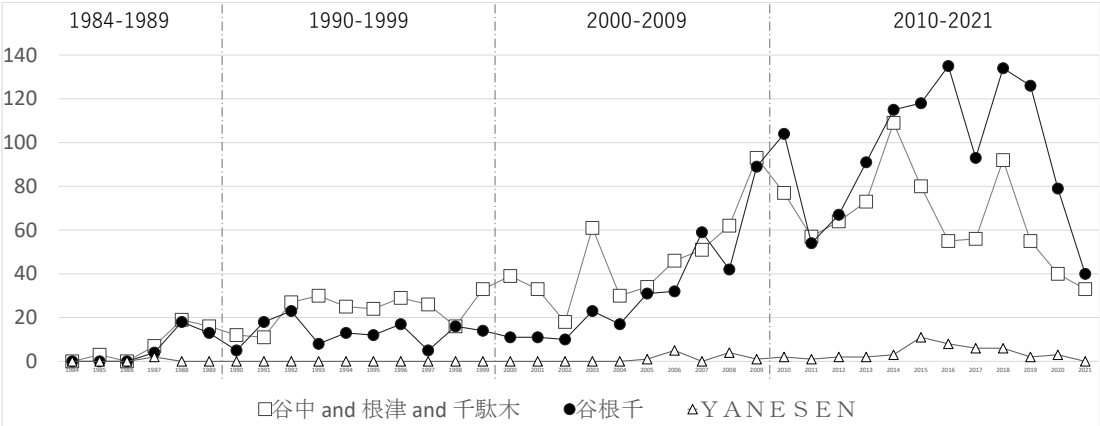

図 3　日経テレコン検索結果

出所：日経テレコン検索結果をもとに著者整理

1989 年 5 月 27 日東京読売新聞の、文京区と台東区が協力して秋祭りを開催することを伝える記事に、「この一帯は通称『谷根千』と呼ばれ、昔から住民たちの連帯意識も強いところ。」(14)とあり、エリア名としての「谷根千」が、人々に広まっていることがわかる。

一方、同年 8 月 28 日日本経済新聞夕刊では、「『谷中・根津・千駄木』（略称『谷根千』）の編集人、森まゆみさんは『古いものが残っているという特殊性を手がかりに、町づくりを仕掛けていきたい』と雑誌の狙いを語る。」(15)と、雑誌の略称の表現があり、同じ時期であっても、雑誌名とエリア名の両方の意味で使われている。

『谷根千』の編集者たち自身が、「谷根千」という言葉を、雑誌名の略称として、特集記事の冠名として、そしてエリア名として誌面で使う機会が増えるにつれ、読者や委託販売の協力店の人たちも、雑誌を『谷根千』、編集者たちを「谷根千さん」、地域を「谷根千」と呼ぶようになったと考えられる。

[1] 2008 年 1 月以降の東京の各テレビ局（フジテレビを除く）、2015 年 1 月以降の大阪、名古屋の各テレビ局、東京のフジテレビで放送された番組内容（放送日、番組名、サマリーなど）が対象とされている。

1.1.3. 地域雑誌『谷根千』の活動の認知

① NTT タウン誌大賞

1985 年 11 月、地域雑誌『谷根千』が、第 1 回「NTT タウン誌大賞」を受賞した。全国から 408 誌のタウン誌が応募し、どれだけ地域文化・地域コミュニケーションの発展に貢献しているかを選考基準に選ばれた大賞 10 誌のひとつが『谷根千』であった(16)。同賞の表彰式や受賞誌による座談会の様子とともに全国 468 誌のタウン誌を紹介する、ガイド本『全国タウン誌ガイド』が同年 12 月に発行され、全タウン誌の発行所と全国の主要図書館に贈呈された(16)。同ガイド本の受賞誌紹介と座談会の記録のページ上で、『谷根千』は、「谷中・根津・千駄木」と表記され、座談会の司会者からは、「谷中・根津・千駄木さん」と呼ばれている(16)。各誌紹介ページで、誌名は「地域雑誌谷中・根津・千駄木」と表記されているものの、発行所名には「谷根千工房」と記載され、見出し紹介欄には、小さい文字で「谷根千味のグランプリ」と「谷根千マップ」が記載されている(16)。

さらに『谷根千』は、1988 年の第 4 回「NTT タウン誌大賞」を再び受賞し、1994 年の第 10 回 NTT 全国タウン誌フェスティバルで「特別賞」を受賞した(17)。

森まゆみ氏が、第 1 回受賞誌座談会のタウン誌仲間から聞いた話としてエッセイに書いているが、当時、「高度成長期以降の『モノからココロへ』『会社人間から地域人間へ』という流れの中で、第二次タウン誌ブームが起きていた」(2)ことから、毎回 400〜600 誌もの全国のタウン誌の中から特に秀でた雑誌として選ばれたことは、『谷根千』の域内外での知名度をさらに高めることに寄与したと考えることができる。

② トヨタ財団研究コンクール助成事業採択

『谷根千』の活動が広く知られるきっかけになったもう一つの大きな出来事は、1986 年 5 月に、大学の教授や学生、地域住民らとともに結成したグループ「江戸のある町　上野・谷根千研究会」が、トヨタ財団の研究コンクールの助成事業に採択され、約 2 年半に渡り「上野・谷中・根津・千駄木の『親しまれる環境』の調査研究」を実施し、1989 年 4 月の研究報告会にて優秀賞を受賞したことである。テーマ“身近な環境をみつめよう”の同研究コンクールには全国から 140 件の応募があり、「江戸のある町　上野・谷根千研究会」は、予備研究助成対象 20 組のうちの一つに選ばれ、50 万円の助成金を得て予備研究を実施した(18)。約半年間の予備研究の報告後、本研究助成対象 8 組の一つに選ばれ 500 万円の研究費を獲得して 2 年間の本研究を実施することができた(19)。

谷根千工房のメンバーらは、研究会の 5 つの班のうちの一つ、「暮らし班」を主に担当し、予備調査アンケートによって、住民らに最も愛されていることが明らかとなった地域の、路地空間の成り立ちを、班の他のメンバーらとともに調査し、その成果を『谷根千路地事典―“東京の地方”叢書①―』としてまとめ、発行した(20)。

グループ結成の背景として、上野、谷中、根津、千駄木の町で、再開発や地上げ行為が散見されるようになり、住民が転出を余儀なくされる状況が続くなか、「このままじゃ、街がダメになる！」と危機感を持ったことが、トヨタ財団の研究コンクールの報告記事（1989 年 4 月）にて紹介されている[19]。共に掲載された『谷根千』第 15 号の表紙画像のキャプションには、「全国的にも有名な手作り雑誌」と書かれてあり[19]、『谷根千』の知名度の高さが認識されていることを示している。

なお、この活動はのちに、地域資産の調査・周知イベントの開催や、歴史的景観・生活環境の保全育成など数々の活動を手がけてゆく、まちづくりグループ「谷中学校」の結成のきっかけとなった[21]。

③ サントリー地域文化賞受賞

1992 年には、サントリー文化財団が、地域文化の発展に貢献した団体や個人に、1979 年から毎年贈呈している「サントリー地域文化賞」を、「地域雑誌の刊行を中心に、地域の歴史と文化を掘り起こすコミュニティ活動」を行う団体として「谷根千工房」が受賞した[22]。雑誌制作だけでなく、地域の環境保全、街並み、歴史・建築物の保存活動に地域住民と共に取り組んできたことが評価され、受賞によって、その活動意義が内外に知られることとなった。

1.1.4. 現在の「谷根千」の使われ方

社会情報学研究者の岡村圭子氏が「2000 年代から、不動産のチラシにも「谷根千」の表記が見られるようになってきた」と考察しているように[23]、『谷根千』とは直接関係のない媒体において、「谷根千」が用いられるようになった。特に、2009 年に『谷根千』が終刊して以降は、雑誌名が言及される機会が減り、エリア名としての「谷根千」が定着した。

現在発売中（2022 年 10 月末時点）の、「谷根千」を紹介している旅行ガイドブック 16 誌（詳しくは、2.3）のうち、「谷根千」が「谷中」「根津」「千駄木」地区の総称であると説明しているガイドブックは、全体の 75%（12 誌）あった。しかし、地域雑誌『谷根千』がその言葉の発祥であることを説明しているガイドブックは、わずか 13%（2 誌）であった。加えて、その 2 誌は同じ出版社であり、他社での言及がないということは、今後ますますエリア名としての「谷根千」の定着が進むと考えられる。

2022 年 9 月末の「谷根千」界隈で実際に見つけることのできた地域雑誌『谷根千』以外の「谷根千」は、「谷根千整骨院」（整骨院：図 4）、「谷根千薬局」（薬局：図 5）、「谷根千 az café」（カフェ：図 6）、「谷根千のへそ」（デザートのメニュー：図 7）、「谷根千ゆかりの文人まっぷ」（文京区立本郷図書館オリジナル制作のまち歩き地図：図 8）、「HOTEL GRAPHY と谷根千」（ホテルが制作するガイドマップ：図 9）、「谷根千フラサークル」（フラダンスの市民活動団体）であった。

図 4　「谷根千整骨院」の外観写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 30 日撮影）

図 5　電柱に設置された「谷根千薬局」の看板の写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 28 日撮影）

図 6　「谷根千 az café」の外観写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 29 日撮影）

図 7　「谷根千のへそ」が載ったメニュー写真

出所：AOYAMA COFFEE にて許可をもらい著者撮影（2022 年 9 月 29 日撮影）

「谷根千のへそ」を提供する珈琲屋「AOYAMA COFFEE」のオーナーらは、東京都内の他の地域から引っ越してきて、2022 年のゴールデンウィークにお店をオープンしたばかりである。この界隈が「谷根千」と呼ばれていることは、以前からテレビ等で知っており、ちょうどお店が、谷中 2 丁目と根津 2 丁目、千駄木 2 丁目の接する場所に立地していることに気づいたことから、「アフォガード」（バニラアイスにエスプレッソ等飲料をかけるデザート）のメニュー名に命名したそうである。命名後、地域のことに詳しい近所の喫茶店の店主から、地域雑誌『谷根千』がエリア名の由来であることを聞き、すぐに森まゆみ氏が書した、谷根千初心者向けの書籍『谷根千のイロハ』を読んで勉強したそうである。『谷根千』が終刊となっても、地域の人たちが語り継ぐ限り、『谷根千』のことは伝え続けられるであろう。

図 8　「谷根千ゆかりの文人まっぷ」の写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 28 日撮影）

図 9　「HOTEL GRAPHY と谷根千」マップの紹介コーナーの写真

出所：HOTEL GRAPHY ロビーにて許可をもらい著者撮影（2022 年 9 月 27 日撮影）

1.2.　「谷根千」の人気エリア化の状況

1.2.1.　観光客数

「谷根千」地域で最も観光客の集まる谷中地区が属する、台東区の観光客数（図 10）は、2000 年代より国内外からの観光客が着実に増加した（2020 年以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で減少）。「谷根千」界隈の最寄り駅の一つ、日暮里駅は、2010 年に在来線で国内最速の特急列車が導入され[24]、成田空港から最速 36 分で到着できるようになったことで「世界からの玄関口」となり[25]、外国人観光客の流入が著しく増加した。また、台東区

全体だけでなく、谷中地区の観光客数も 2008 年から 2 倍以上に増えており（図 11）、「谷根千」地域の人通りが多くなっていたことがわかる。

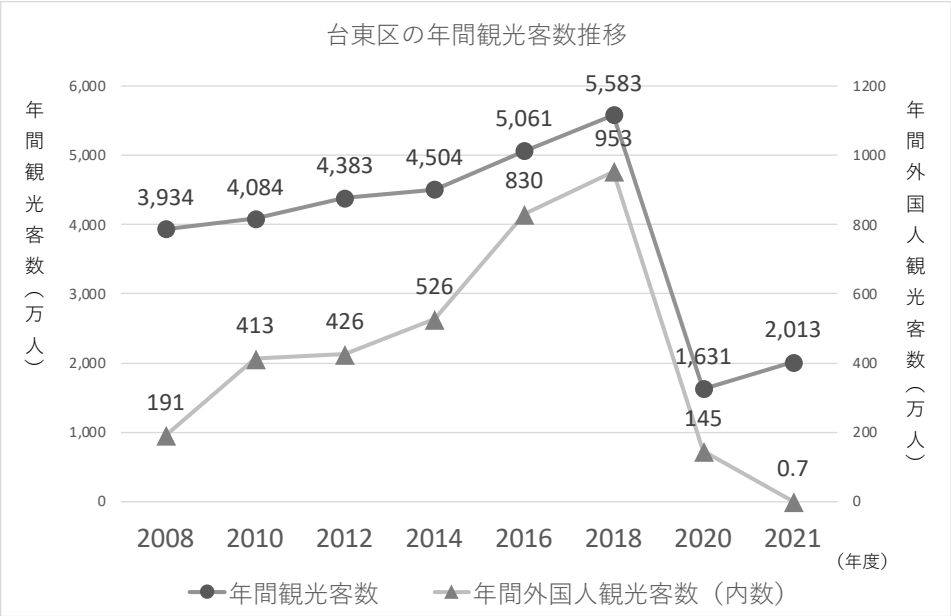

図 10　台東区の年間観光客数

出所：台東区「令和 3 年台東区観光統計分析報告書」（2022）をもとに著者整理

図 11　谷中地区の年間観光客数

出所：台東区文化産業観光部観光課「台東区観光統計・マーケティング調査」（2010、2012、2014、2016 年度）をもとに筆者作成。
※注：2012 年度調査は、精度向上を目的にアンケート調査地点や設問項目を増やし「観光目的で来訪した観光客の割合」が低下したため、最終的な推計値が減少した。

1.2.2.　商店街の賑わい

日暮里駅から近い谷中銀座商店街（通称：谷中ぎんざ）は、「谷根千」の観光スポットとしてメディアに度々取り上げられる商店街である。商店街が 1996 年の NHK 朝のテレビ小説『ひまわり』の舞台になると、域外からの来街者が増え、2000 年代に近隣型商店街から広域型商店街へと発展し、図 13 に示すように、2000 年代後半以降、平日と休日の来街者の差が広がり、観光地化が進んだ[26]。

図 12　谷中ぎんざの風景（右）と、共通デザインの軒先の看板（左）の写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 29 日撮影）

（一社）中小企業診断協会の 2015 年の調査報告によると、谷中ぎんざは、過去に 3 度の危機に面したがその度に対策を講じて乗り切ってきた歴史がある[27]。1 度目は 1969 年の地下鉄千代田線千駄木駅の開通により、商店街を通り抜ける人の数が激減してしまったこと、2 度目は 1978 年にすぐ近くに大型食品スーパーが開店したこと、3 度目は 1985 年頃より周辺にコンビニエンスストアが続々と出店したことである。このような危機に対し、全店特売日の設定やスタンプカードの開始、スタンプ収集者のディナーへの招待、商店街でのお祭りの開催などに加え、ハード面の第一次整備（1984 年）では近代化（カラー塗装やアーチ看板の設置）が行われた。2000 年代以降の来街者増の時流に合わせ、ハード面の第二次整備では「東京下町レトロ」（2007 年）や「猫」（2008 年）をコンセプトにした景観の統一が行われ、2001 年に開設した商店街のホームページも、2014 年と 2018 年に全面リニューアルさ

れた。近年は、スタンプカードやお祭りのコンセプトの見直しが行われ、広域客や観光客だけでなく、近隣マンションの増加によって再び増えてきた地元の客（図 14）にも対応した取り組みがなされるなど[28]、常に進化を続けていることも、谷中ぎんざが人々を惹きつけている要因である。

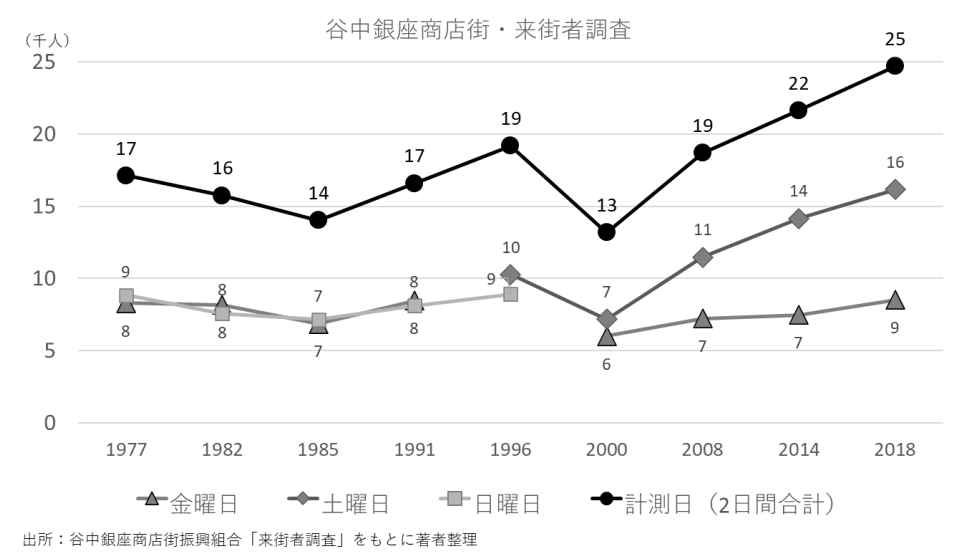

図 13　谷中銀座商店街への来街者数推移

出所：谷中銀座商店街振興組合「商店街研究会平成 31 年 2 月例会」発表資料（2019）p.52「来街者調査」をもとに著者整理

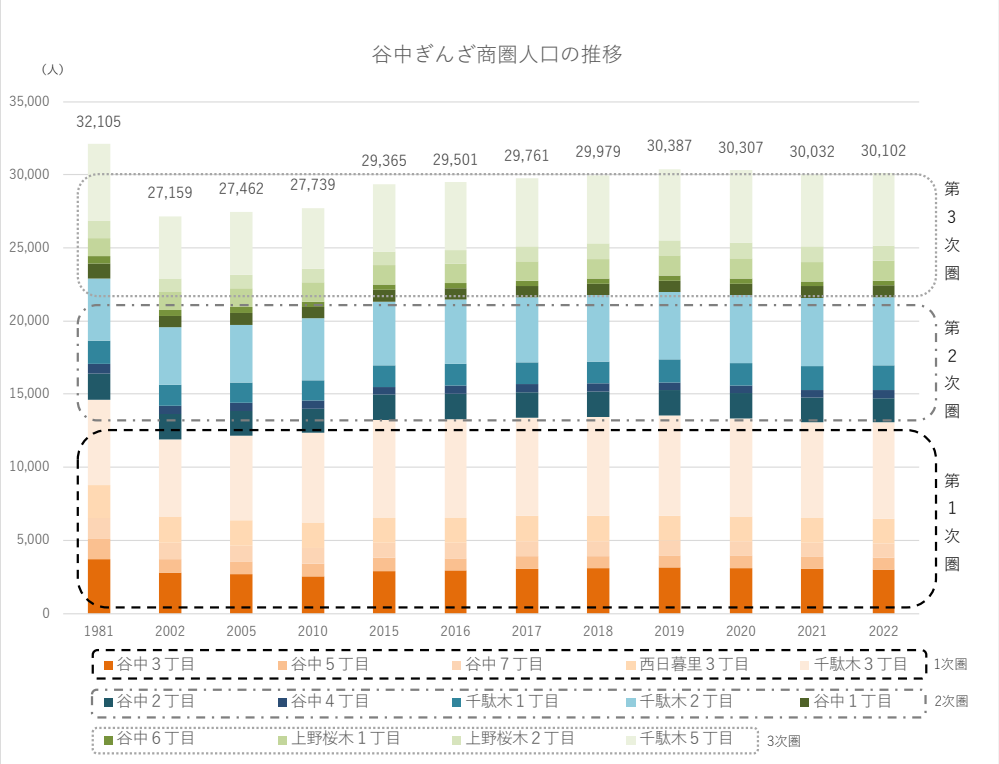

図 14　谷中銀座商圏人口（地元の客）の推移

出所：谷中銀座商店街振興組合「谷中銀座のあゆみ」（1987）p.189-190 で定義されている「商圏」の人口推移を、同資料および、荒川区、台東区、文京区の人口統計をもとに著者整理

1990 年、谷中ぎんざの端にある石段の再整備にあわせ、地域の町会が、石段の愛称を一般公募した。森まゆみ氏によると、偶然通りかかった際に適当に書いて投函した「夕焼けだんだん」が採用された[29]。現在でもその愛称が使われており、谷中ぎんざとともに、多くの人が訪れる人気スポットとなっている。

図 15　夕焼けだんだんの写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 29 日撮影）

1.2.3.　メディアでの言及

エリア名「谷根千」が、1985 年頃からメディアに登場し始めたことは、1.1.2 の③で示したが、表 3 に挙げるように、4 年後の 1989 年 1 月 21 日の日経流通新聞の記事に、「ここのところ『谷根千』（谷中、根津、千駄木）ブームで学生のグループや外国人客が増えた。」と[30]、「谷根千」地域の人気が加熱していることを表す「ブーム」の言葉が使われ、町を訪れる人が増加したことがわかる。2003 年 8 月 1 日の日経トレンディの記事では、「訪れる人といえば以前は墓参りの人が主だったが、最近は若い人の散歩スポットとして注目されるようになってきた。」と[31]、まち歩きを楽しむ若者や中年グループや体験学習として訪れる中学校の存在を紹介している。そして、2011 年 11 月 17 日の日本経済新聞電子版では、「谷根千」が、「路地に沿ってレトロな建物が並び、行列ができるメンチカツ販売店のある『谷中銀座』商店街やカフェなどに大勢の街歩き愛好者が訪れる。」と紹介され[32]、「ブーム」の言葉が使われた 1989 年から 20 年以上経つ 2011 年の時点でも、その人気は衰えていない。

表 3　「谷根千」の人気に関する言及

年	媒体	言及内容	参考文献
1987	日経流通新聞	「この地域は日本的情緒を残すかいわいとして以前から外国人の旅行者に人気があったが、最近は住む人も多い。」	33
1989	日経流通新聞	「ここのところ『谷根千』（谷中、根津、千駄木）ブームで学生のグループや外国人客が増えた。」	30
2003	日経トレンディ	「訪れる人といえば以前は墓参りの人が主だったが、最近は若い人の散歩スポットとして注目されるようになってきた。」	31
2011	日本経済新聞電子版	「路地に沿ってレトロな建物が並び、行列ができるメンチカツ販売店のある『谷中銀座』商店街やカフェなどに大勢の街歩き愛好者が訪れる。」	32

出所：参考文献[33]、[30]、[31]、[32]をもとに著者整理

1.2.4.　住民の記憶

『谷根千』が創刊される前年、1983 年に谷中に引っ越してきた画家の桐谷逸夫氏は、その頃の谷中界隈の雰囲気を「活気がなかった。」とする一方、「しかし個性と好奇心の強い人たちが多かった。」と描写する[34]。そのようななか、『谷根千』の編集者たちは「雑誌作りだけでなく町づくりのために様々な活動を行」い、「町の潜在力を引き出し、町に活気を与えた」と、桐谷氏は彼女たちの功績を讃える[34]。

後述する新たなローカルメディア『まちまち眼鏡店』店長の坪井美寿咲氏は、谷中で生まれ 2000 年代を幼小中学生として過ごし、谷中界隈の人出を次のように描写する。近所の谷中ぎんざは、日常的な買い物だけでなく通学路としても訪れる商店街であり、顔馴染みの店主とは店の前を通る度に必ず挨拶をしていた[35]。2000 年代中頃に、街の散策スポットやグルメ情報を紹介するテレビ番組で、谷中ぎんざのお肉屋さんのメンチカツなど食べ歩きできるものが取材されると、店に行列ができるようになった。それでもなお、店主と挨拶を交わしていたが、その後人出が急激に増え、ついに人垣越しに挨拶をすることが困難になり、挨拶ができなくなった[35]。同じ頃、町のあちこちで、カメラを持って歩く中年男性や外国人を見かけるようになり、旗を持った引率者に連れられた団体ツアー客も商店街だけでなく住宅街でも見かけるようになった[35]。

1.2.5.　プロジェクトとプレイヤー

1985 年 3 月、台東区の内山榮一区長は、東北・上越新幹線上野駅開業にあわせ、「下町ライブ計画」を宣言し、6 億円の予算で「下町・国際シンポジウム」（1985 年 11 月実施）や「国際ダウンタウンカーニバル」など多くのイベントを年間を通じて開催することを発表した[36]。当初、区長の指す

「下町」のメインは浅草や上野であったが、にわかに注目を集める「谷根千」界隈の盛り上がりをさらに助長するため、台東区が文京区に持ちかけ、1988 年 1 月に両区から商店街や町会の代表者ら 15 名ずつが参加して実行委員会を結成し[37][38]、「区境にとらわれず、下町を PR し、地域の活性化を図って連帯感を盛り上げる」ことを目指し、1989 年 10 月に[2]、「文京・台東下町まつり」を開催した[39]。その後 1998 年まで毎年 10 月に、一年ごとに開催場所を根津神社（文京区）の境内と谷中霊園（台東区）の園路とに替えながら開催された。1999 年からは、台東区が支援をやめ、文京区も経済事情を理由に補助金を減らしたため、祭りの継続が危ぶまれたが、それぞれの区の地域住民が主体となって、台東区では「谷中まつり」が、文京区では「根津・千駄木下町まつり」が、毎年 10 月に開催されることになり[40][41]、現在も、地域の賑わいづくりの場となっている。

図 16　「第 24 回 根津・千駄木下町まつり」ポスターの写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 30 日撮影）

また、1993 年に、2.1.3 で示したトヨタ財団研究コンクールの助成を受けた調査研究活動をきっかけに結成された、まちづくりグループ「谷中学校」のメンバーが中心となり、「地域の手作り文化の顕在化と交流を通して、町の文化を地元の人同士で再確認し、新旧住民の交流の場をつくる」ことを目的として、「谷根千」界隈の寺やお店、民家など町中の空間を使った展覧会「谷中芸工展」（2008 年より「芸工展」に改称）が始まった。会期に合わせてガイドマップが作成され、参加者は、アートを鑑賞したり職人の手仕事を学んだりしつつ、まち歩きをしながらアーティストや職人、地域住民との交流を楽しめる仕組みになっている。毎年 10 月開催の継続によって、2008 年の時点には、域内外における「谷中はアートや手作り文化のある町」というイメージが定着し、手作りの店やギャラリーを構える若者の転入につながった[21]。

---

[2] 当初、昭和 63（1988）年 10 月開催を予定していたが、「昭和天皇のご病気による自粛で」[39] 翌年に持ち越された。

図 17　第 30 回「芸工展 2020 まちかど展覧会」ガイドマップの写真

出所：著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

2005 年には、「谷根千」界隈の、ライター、編集者、書店オーナー・店員など本に関わる人たちが、「たくさんの本好き、散歩好きの方にこの街を訪れて魅力を感じてほしい」と、「不忍ブックストリート」という名の実行委員会を結成し、以降、マップの制作と、まちなかで様々な人が一箱分だけの古本市を出店できるイベント「一箱古本市」の開催を毎年実施してきている(42)。「一箱古本市」はそのコンセプトが多くの反響を呼び、その後全国各地で開催されるほど有名になった(43)。

図 18　「不忍ブックストリート MAP 2022」マップの写真

出所：著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

イベントの他にも、日常的な立ち寄りスポットとして、1993 年に廃業した銭湯を改築した現代アートギャラリー「スカイザバスハウス（SCAI THE BATHHOUSE）」が、2013 年に築 60 年の木造アパー

トを改修した文化複合施設の「HAGISO」（アパートの元住人の建築家やアーティストらによるプロジェクト）が、2015 年に築 80 年の古民家を再生した複合施設「上野桜木あたり」（「谷中学校」から派生した NPO 法人たいとう歴史都市研究会らによるプロジェクト）がオープンしたり、2018 年に名前のない通りに面した店のオーナーたちが集まり台東区愛称事業に申請して「谷中キッテ通り」のネームプレートを電柱に設置したり、明治 3 年創業の谷中の花屋「花重」が歴史的建築様式を活かして 2023 年 3 月にリニューアルオープンしたりと、新たな観光スポットが次々と生まれている。

図 19　「スカイザバスハウス（SCAI THE BATHHOUSE）」の外観写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 27 日撮影）

図 20　「HAGISO」の外観写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 28 日撮影）

図 21　「上野桜木あたり」の外観写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 27 日撮影）

図 22　「谷中キッテ通り」の標識（右）と、塀を利用して設置された「谷中キッテ通り」の案内チラシや地図を置く棚「谷中キッテ案内」（左）の写真

出所：著者撮影（2022 年 9 月 30 日撮影）

2015 年、谷中・根津・千駄木エリアの飲食店や各種店舗、地域で活動する人などを取材、掲載するタウン誌「rojiroji magazine（ロジロジ・マガジン）」が文京区在住の秋山都氏と湯川建祐氏によって創刊された[44]。冊子版に加え電子書籍版もあり、最新号の第 7 号は 2022 年 4 月に発行された。千駄木で人気の本屋「往来堂書店」では、『地域雑誌　谷根千』のバックナンバーと同じ本棚に

陳列され、手書きポップで「最新のやねせん」と紹介されている（2022 年 9 月末時点）。この他、Instagram、Twitter、Facebook、Tumblr、など多チャンネルでの情報発信が行われている。

図 23　『地域雑誌 谷根千』のバックナンバーと『rojiroji magazine』が陳列される棚とポップの写真

出所：往来堂書店にて許可をもらい著者撮影（2022 年 9 月 30 日撮影）

2022 年 3 月末には、前述の「HAGISO」を運営し、谷根千を拠点とする建築事務所の（株）HAGI STUDIO が、クラウドファンディングと台東区新ビジネスチャレンジ支援事業助成金を活用して、谷根千のローカル Web メディア「まちまち眼鏡店」を立ち上げた[45]。観光客が増えるにつれ、「谷根千」が既存メディアで「昭和」や「レトロ」といったステレオタイプで扱われ、まちが消費され使われるだけになってしまうような危機感を感じたメンバーたちが、この街に暮らす人々から見た「谷根千」の景色、道、建物、人を可視化し、デジタルでアーカイブすることで、他の人がその見方で街を見ることができるプラットフォームを作りたいと考え、立ち上げに至った。また、地域で商いをする人たちが、求人で苦労しており、マッチ度の悪さにより離職率が高くなってしまっている現状を知り、この街での働き具合や暮らしはどんなものなのかを、店単位だけでなく街の単位で発信する必要性を感じたことも、立ち上げのもう一つの理由である[35]。現在、谷根千界隈には、様々なレイヤーで活動する人達がいて横のつながりはあるが、それを縦につなぐものが無いため、「まちまち眼鏡店」がその役目を担うことができればという願いを込め、幅広い年齢層の読者・視聴者を想定した多様なプラットフォーム（SNS や音声・動画配信サイトなど）をアウトプット先として想定している[35]。

2. 『谷根千』ムーブメントの要因

地域雑誌『谷根千』から、地名「谷根千」が一般に浸透し地域ブランドとして確立するほどのムーブメントが起きた要因として、①人、②内容（名称、クオリティ、双方向のコミュニケーション、販路）、③マスメディアと観光、④地域活動が挙げられる。

2.1. 人

『谷根千』編集者の仰木ひろみ氏、山﨑範子氏、森まゆみ氏の才能と性格、志、そしてバイタリティ（どんな困難にもあらゆる方法で乗り越えようとする活力）が、このムーブメントには欠かせない。

山﨑範子氏と森まゆみ氏には約 2 年間の出版社での勤務経験があり、雑誌の編集に加え、どう売るか、どうすれば読んでもらうかという戦略や考え方に関しても素地があった。さらに、森まゆみ氏は、出版社の前に 7 か月間 PR（パブリック・リレーションズ）会社にも勤務しており、ここで習得した、例えば協力者の増やし方や、行政機関の中での味方の見つけ方、ジャーナリズムを味方につける方法などの戦術・戦略経験が、その後の市民運動に活かされている、と 2016 年の講演で話す(46)が、この経験は地域雑誌『谷根千』の協力者、支援者、愛読者、情報提供者のつくり方にも活かされていたと考えられる。

また、森まゆみ氏と山﨑範子氏は二人とも子どものころから歴史に関心があり、森まゆみ氏は小学生の時に郷土史クラブに入り(47)、壁新聞やガリ版新聞を作るのを好み(48)、山﨑範子氏は中学生の頃から同人誌、フリーペーパー、壁新聞などを作り交通量調査やまちにあるお店の調査を発表していた(49)。『谷根千』の読み手を飽きさせないレイアウト、読者の遊び心をくすぐるテーマ設定には、彼女たちの幼少期からの好奇心と実践力が活かされている。

仰木ひろみ氏もオルガニストとしての活動に加え、オルガン製作会社勤務の経験があり、『谷根千』の活動を通じて取材や執筆の経験を積みながらも、渉外や事務所運営に必要な能力を有していた。それは、雑誌を発行するだけでなく、地域のあらゆる人々が出入りする集会所的な場となった谷根千工房の事務所運営に欠かせない能力である。

また、森まゆみ氏の文才は、100 冊を超える著書の数々(50)や、他の学者らによる評価からも窺い知ることができる。哲学者の鶴見俊輔氏は、1994 年の森まゆみ氏との対談で、「（森さんの）文章にはとても感心しました」と話す(48)。また、『谷根千』初期の頃に、妻の藤原馨氏とともに、谷根千工房と関わりの深かった建築史家の藤原惠洋氏は、「（森さんは）自らを編集者というが、一つの物語を作る作家としての能力を惜しみなく雑誌に注いでいた」、「人が喋った話を、人が喋ったように話す、という特殊な能力を持っていた」と評価し、そして、全てを説明してしまいがちな自らの文章と違い、「読者が物語に自分の力で乗り込んでくるくらいに、あえて全てを説明しない」森まゆみ氏の文章が、読み手の好奇心や想像力

を刺激し、読者を惹きつけていると絶賛する[51]。

2.2. 内容（名称、クオリティ、双方向のコミュニケーション、販路）

2.2.1. 名称

これまで誰も一括りにしていなかった場所を一括りにして、「谷根千」という聞き心地のよい言葉で呼び始めたことは、ムーブメントの大きな要因のひとつである。

建築史家の陣内秀信氏は、2021 年の森まゆみ氏との対談の中で、「『谷根千』というネーミングが絶妙。タイトルとしてだけじゃなくて、コンセプトが抜群にいい。谷中、根津、千駄木を一緒の地域として括ってしまうという発想が画期的でした。」と話し、お屋敷町と町人地の住民が互いに上下意識を持ちつつも助け合いながら暮らしてきた江戸時代からの地域性を、『谷根千』はうまく切り取った、と高く評価する[52]。

また、行政区域ではなく住民目線の生活圏を中心に、なおかつ、明確な地理的境界を定めずに[3]『谷根千』の刊行を続けたことは、岡村圭子氏が指摘するように、メディアや個人による「谷根千」のイメージのズレを生じさせた[23]しかし、その曖昧さが余白を生み、『谷根千』に共感する人や親近感を持つ人を増やし、認知拡大に繋がったのであろう。

2.2.2. クオリティ

『谷根千』第 45 号（1995 年 12 月発行）の「サトウハチロー」特集を読んだ作家の小沢信男氏から、「後世、弥生町とサトウハチローを調べる人が現れたら、これは第一級資料になるでしょう」（1996 年 3 月発行『谷根千』第 46 号 p.48）と絶賛されるほど、『谷根千』の記事の質は高かった。1989 年 8 月 28 日付日本経済新聞の記事でも、『谷根千』は、「郷土史的な特集の切り口の鋭さと、情報が次々と寄せられる『場』の活性化ぶりが、地域外の人々からも評価されている」[15]と紹介されている。

森まゆみ氏の 1996 年のインタビュー記事によると、仰木氏は「衣服・食べ物など生活風俗」に、山﨑氏は「自然環境や都市問題」に、森氏は「文学・美術史や建築」に興味や関心を持ち、三人のそれぞれの関心が編集に生かされたことで雑誌の独自性が作られた[53]。

多種多様なテーマと丹念な取材が『谷根千』の質を高め、幅広い読者を惹きつけていた要因であろう。

---

[3] 「『地域雑誌　谷中・根津・千駄木』其の九」（昭和 61（1986）年 9 月 20 日発行）p.35、読者からのお便りへの返信に編集者が「谷根千に境界線はありません。」と記している。

2.2.3.　双方向のコミュニケーション

『谷根千』は創刊当初から、一方通行のメディアではなく、双方向のコミュニケーションの場となることが意識されていた[15]。間違いを恐れずにまず書いて発行し、指摘された間違いは謝って訂正し、新たなコミュニケーションや気付きが生まれた。

歴史学研究者のジョルダン・サンド氏は、「『谷根千』は徐々に、誌上に出会いの空間を創り出し、編集人、記事の書き手、イラストを提供する画家、聞き書きの相手、谷根千内外の読者、便りの投稿者といった人々が、この空間に加わってい」き、「誌上のコミュニティ」が形成されたと分析する[54]。

販売店に『谷根千』を買いに行くことができない購読希望者へは、宅配や郵送による販売が行われていた[49]。その購読者向けに、主催や協力イベントの情報やスタッフの身近な話が手書きで書き込まれた『谷根千通信』が毎回作成され、新刊の『谷根千』に同封された[49]。このような手作りだよりも、編集者らと読者の距離を縮め、イベントに参加したりお便りを送ったりといったアクションを促すことに一役買っていたと考えられる。

図 24　定期購読者向けに同封する手作りだより「谷根千通信」（一例）の写真

出所：谷根千工房に過去の「谷根千通信」を提供してもらい、著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

2.2.4.　販路

『谷根千』の販路について、当初、一般的なタウン誌のように、地域で商売をしているお店から広告料をもらう代わりに雑誌を何十部か提供し、店頭で無料で配ってもらうことが考えられていたが、地域住民を相手に数百円の商売をしているため雑誌の無料配布を付加

価値と捉えないお店が多いことがわかったため、雑誌本体に値段をつけて協力店に置いてもらい、読者に買ってもらう方針をとることになった[2]。『谷根千』創刊号の販売が好調だったことについて、週刊『エコノミスト』編集部の原沢政恵氏は、「お金を出して買ってもらえる数少ないタウン誌の誕生だった」と考察する[55]。

約 300 の『谷根千』販売協力店は、主に「谷根千」地域に所在し、本屋だけでなく、飲食店、専門店、ギャラリー、旅館、病院、大学生協など多様性に富み、幅広い読者層へのリーチと新たな読者の獲得を可能にした。『谷根千』を店頭や受付に置いてもらい、売れた分だけ後日 8 掛けで精算するという委託販売の方式が取られ、その場で 100 部を買取りしてくれる協力店は多い時で 20〜30 軒あった[49]。

新しい号を発行すると、毎回 3 人で手分けして、約 300 の販売協力店に配達していた。それぞれ子連れで自転車による配達であったが、この行為を外部に委託しなかった理由の一つには、販売店の方たちとの交流が、『谷根千』の記事となりうる情報収集の機会にもなっていたことがある[20]。また、毎回、余った表紙の紙で、B4 の半分や A3 の半分のサイズのポスターを、表紙のデザインに合わせて自分たちで作成し、販売店に渡していた。薄い雑誌で目立たないため、金額と特集のテーマがわかるようにという目的で創刊初期の頃から作られ始め[10]、終刊に近い 2008 年 12 月の時点には、最新号のポスターが町の様々なお店に貼られている印象を持たれていた[17]。

図 25　各号（手前）と雰囲気を合わせた手作りポスター（奥）

出所：谷根千工房に過去のポスターを提供してもらい、著者撮影（2022 年 10 月 31 日撮影）

最初は難しいと思われた広告収入も徐々に獲得できるようになり、広告料は、掲載ページやサイズ、載せ始めた時期や、広告内容のデザイン有無によって様々であるが、最も大きい

裏表紙の広告枠の費用は 5 万円で、ホテル、飲食店、和菓子屋など固定の広告主があり、四半期ごとに順に入れ替わるようになっていた(49)。表表紙の裏面下半分の広告枠は、文化芸術分野の広告に定められ、固定の美術館や記念館のほか、ギャラリーや出版社などが広告を掲載した(49)。

2.3. マスメディアと観光

谷根千工房が、新聞記者やテレビ局から映像映えする場所の問い合わせを受けたり、特定のシチュエーションの再現の相談を受けたりした背景には、1980 年代の江戸・東京ブーム(56)と、それに続く下町ブーム、そして「下町」の観光地化(57)がある。ブームに合わせて話題を探すマスメディアにとって、郷土史や文化、町並みを若い女性編集者らの目線で取り上げる『谷根千』は話題の宝庫であり、谷根千地域に取材対象を見つけようとした。そして、社会学者の五十嵐泰正氏が、地理的な定義とはあまり関係なく「『下町』と呼ばれる場所が（観光）スポット化する傾向が加速」したと指摘するように(57)、マスメディアが谷根千エリアを取り上げるにつれて、地域の観光地化が進んだ。

1984 年 10 月、『谷根千』創刊号が初めて販売される機会となった「谷中菊まつり」を、明治期以降七十数年ぶりに復活させた「すし乃池」の店長で、谷中地区町会連合会会長でもある野池幸三氏は、2009 年夏の『谷根千』終刊イベントの集まりにおいて、「谷中菊まつり」が成功しその後毎年継続して開催できるようになったきっかけは、谷根千工房の編集者たちが「笠森お仙[4]の手まり唄」を見つけてきてくれたことだったと話し、これまで来てくれたことのないテレビ局がやって来て、「笠森お仙の手まり唄」を取材・放映し、祭りの人出が急増したことだという(58)。

また、2003 年の陣内秀信氏との対談で、森まゆみ氏が「始めたころ、『今までこの地域は話題がなくて困っていたけれど、良いものが出た』と、新聞記者がよく取り上げてくれた」と話すのに対し、陣内氏は「江戸東京ブームが 85〜86 年からですね。その前に『谷根千』が創刊され、ブームに弾みがついた」と分析し(56)、同氏は 2019 年にも、法政大学江戸東京研究センターの研究活動を報告する書籍の中で、谷中地区の「再評価、イメージアップに貢献した」のが『谷根千』である、と評価している(59)。

「大宅壮一文庫」雑誌記事データベースによると、雑誌記事に「谷根千」が初めて登場したのは、1988 年に創刊された若い女性向け雑誌「Hanako」の 1989 年 2 月 2 日の記事「ラスト・ダウンタウン特集　谷中・根津・千駄木」である。この年に、この雑誌を発祥とする社

[4]江戸時代に谷中の水茶屋で働いていた看板娘で、江戸の三美人（明和三美人）の一人として大人気だった。

会現象から生まれた言葉「Hanako 族（ハナコ族）」[5]が流行語大賞を受賞しており、「下町」を求めて谷根千に向かう若い女性が増えたと推察できる。

「大宅壮一文庫」データベースにおける、「谷中 and 根津 and 千駄木」、「谷根千」、「YANESEN」を含む雑誌記事のそれぞれの年間発行数の推移（図 26）を見ると、「谷中・根津・千駄木」および「谷根千」は、2000 年代以降安定的に発行され、2009 年に『谷根千』が終刊した後もその傾向は大きく変わっていない。「谷根千」がエリア名として言及され続け、エリア名としての認知がさらに広がったと考えられる。

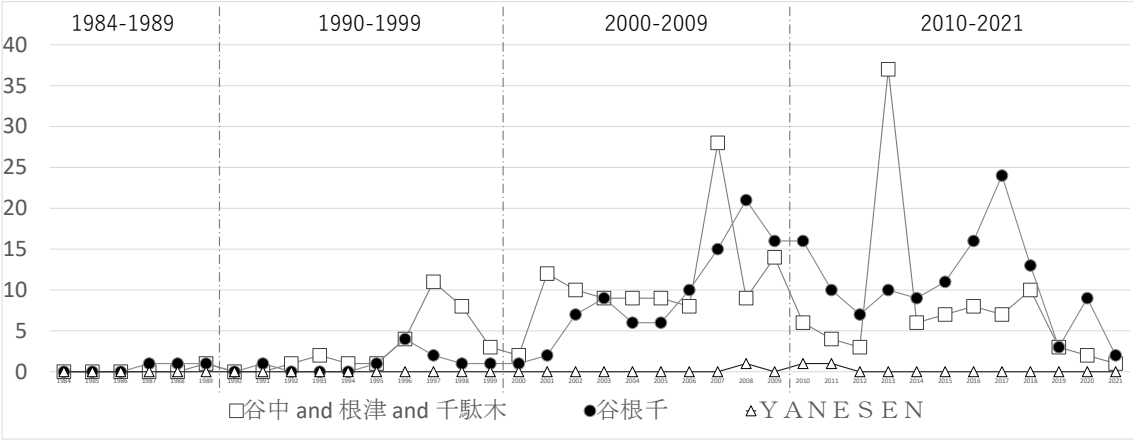

図 26　大谷壮一文庫データベース検索結果

出所：大宅壮一文庫検索結果をもとに著者整理

2022 年 10 月末時点で発売されている、東京を旅先とする旅行ガイドブック 17 誌のうち 16 誌に「谷根千」が掲載されており、観光地としての「谷根千」の人気の高さがわかる。表 4 は、16 誌に掲載されている紹介文から抽出した「谷根千」を表現するキーワードである。

「散歩」や「まち歩き」に適した場所であるという認識は全誌に共通している。7 割強でみられる「下町」という表現は、前述した「下町ブーム」の影響であるが、特徴として、「寺町」、「商店街」、「レトロ」、「昭和」、「江戸」、「猫」などの多彩な表現がみられることが挙げられる。また、「文化・芸術・個性的」の背景には、美術評論の西原珉氏が指摘するように、寺の講堂がアトリエ代わりになったり、家賃の代わりに絵が受け取られたり、町のあらゆる空間を使った展示会（「芸工展」）が開催されたりする「谷根千」地域の、住民らのアートに対する理解の深さがある(60)。これら「谷根千」の観光地としての多様性は、幅広い層の観光客を引きつける要素があることを示しており、地域ブランドが確立した要因であろう。

---

[5] 1986 年男女雇用機会均等法施行により女性の社会進出が進み、雑誌「Hanako」から流行情報を得て街に繰り出す女性が多くみられたことから生まれた言葉。

表 4　「谷根千」を紹介する旅行ガイドブックでの表現キーワード

ガイドブック	出版社	出版年	紹介ページタイトル	紹介ページ本文での表現キーワード												地域名の説明	地域雑誌『谷中・根津・千駄木』の説明
				散歩・まち歩き	下町	寺町	商店街	レトロ	ノスタルジック・懐かしい	暮らし・庶民的	文化・芸術・個性的	昭和	猫	江戸	人情		
るるぶ 東京 超ちいサイズ	JTBパブリッシング	2022	昔懐かしい街並みや商店街が魅力 谷根千	○	○	○	○	○	○	○				○		○	
片手で持って歩く地図 東京	成美堂出版	2022	郷愁あふれる下町散歩の人気コース 谷中・根津・千駄木	○	○	○	○		○		○	○				○	
ハレ旅 東京	朝日新聞出版	2021	下町情緒あふれる人気のおさんぽスポット 谷根千	○	○	○		○		○	○					○	
Tokyo guide 24H	朝日新聞出版	2021	レトロっぽが新鮮な 谷根千へ。	○	○	○	○	○		○			○				
地球の歩き方 aruco　東京	学研プラス	2021	谷根千 情緒あふれる下町をぶらりおさんぽ	○	○			○	○	○			○			○	○
まっぷる 東京観光mini'22	昭文社	2021	路地裏も楽しい下町ディープ探検	○	○					○							
まっぷる 超詳細！東京さんぽ地図	昭文社	2021	谷根千　のんびりとした雰囲気が漂う下町 神社や静かな寺町、名物商店街を散策	○	○	○	○	○				○	○			○	
＆ＴＲＡＶＥＬ東京 2022 ハンディ版	朝日新聞出版	2021	谷根千エリア＆まだまだ行きたい！	○				○								○	
おとな旅プレミアム 東京	TAC出版	2021	庶民の人情と下町の活気が残る 谷中・根津・千駄木	○	○	○	○					○		○	○		
地球の歩き方 東京	学研プラス	2021	谷中・根津・千駄木（谷根千）	○				○	○		○						○
ことりっぷ 東京	昭文社	2020	①懐かしい風景に出会える谷根千を街歩き ②探検するように、谷根千の路地裏さんぽへでかけましょう	○		○	○		○	○	○	○				○	
ココミル東京	JTBパブリッシング	2020	下町の人情とアートが根付く谷根千をのんびりおさんぽ	○	○						○				○	○	
ソロタビ 東京・横浜	JTBパブリッシング	2019	ディープタウン：下町情緒をひとり感じながら　谷根千　谷中・根津・千駄木　のんびりさんぽ	○	○				○					○		○	
歩いて楽しむ 東京	JTBパブリッシング	2018	人情味あふれるノスタルジックな下町 谷中　根津　千駄木	○	○				○						○	○	
COLOR＋東京	昭文社	2018	レトロな魅力漂うエリアで食べ歩き♪ ほっこり谷根千グルメさんぽ	○		○	○	○	○			○	○			○	
楽楽 東京	JTBパブリッシング	2017	坂道・寺町の谷根千 谷中・根津・千駄木	○	○		○				○			○		○	
			合計（誌）	16	12	8	8	8	8	6	6	5	4	4	3	12	2

出所：各旅行ガイドブック（表 4）をもとに著者作成

2.4. 地域活動

谷根千工房のメンバーらは、雑誌の刊行のほか、お祭り、展覧会、映画上映会、まち歩きイベント、講演会、路上観察会、環境調査など多くの地域活動を行い、住民運動にも協力している[17]。住民運動は、主なもので、上野の奏楽堂のパイプオルガンの保存や、赤レンガ建築の東京駅の保存、不忍池の地下駐車場建設問題などだが、ほとんどが単独で起こした運動ではなく、協力を求められたり、相談を受けたり、困っている人に出会ったりといった外部からの働きに対し、谷根千工房としてできることは何かを考え、行動に移してきたものである。岡村圭子氏は、「『谷根千』においては、住民が一丸となった強烈な反対運動を先導するのではなく、あくまで『記述』というスタイルをとる」と分析する[23]。

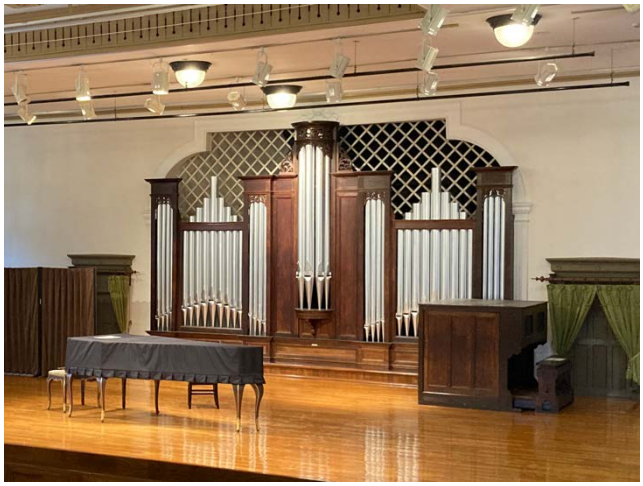

図 27　保存された奏楽堂のパイプオルガン

出所：著者撮影（2022 年 9 月 27 日撮影）

また、森まゆみ氏と山﨑範子氏が、『谷根千』を創刊する前に、谷根千の近隣の下谷、根岸界隈での調査活動をまとめた『東京の町を読む』(1981 年出版)の著者であり当時法政大学助教授の陣内秀信氏に会いに行った際のアドバイスがきっかけで、雑誌の編集部とは別に、「谷中・根津・千駄木の生活を記録する会」が作られた[2]。そのアドバイスとは、自分たち(編集部)とは別に「研究調査のための別部隊を組織したらどうか」[2]と、男性の多い建築学の研究者たちとは違う、子育て中の主婦だからこそ気付く分野があり、「狭く建築史や都市史だけでなく、被服や食生活など広く生活の全体をみたらおもしろい」[2]というものであった。しかし実際には、調査には行けても文章化する人がおらず、知識欲の高い、会の参加者たちへ向けた講演やワークショップなど、編集部側でコンテンツを準備する必要があり、期待通りの調査部隊とはならなかったが、人出が必要な場面や何かの会を催す場合に、声を掛けるグループとして役立った[49]。

地域の様々な人との活動が、雑誌の特集記事に発展することもあり、また取材活動から地域活動に発展することもあった。そして、それらの活動を通じて、多くのキーパーソンや協

力者、支援者に出会うことができた。谷根千工房のメンバーらが、雑誌刊行だけでなく、雑誌刊行と地域活動の両方に注力していたからこそ、「谷根千」ムーブメントは拡がりを見せたと考えられる。

表 5　谷根千工房が関わった様々な活動の一部

年月	主な活動内容
1984 年 10 月	第 1 回菊まつり開く
1984 年 12 月	「谷中・根津・千駄木の生活を記録する会」（以降、「生記会」）発足
1985 年 2 月	「奏楽堂のパイプオルガンをよみがえらせる会」発足
1985 年 4 月	「谷根千第 1 回井戸端学校」
1985 年 8 月	全生庵にて第 1 回円朝まつり
1986 年 10 月	生記会「谷根千探鳥会」
1987 年 8 月	「赤レンガの東京駅を愛する市民の会」結成、10 万人以上の署名を集める
1988 年 4 月	「谷根千ウィーク」を開催（1989 年 GW に「谷根千ウィークＭＡＹ’８９」）
1988 年 5 月	東京の下町などで自然保護活動を続けている複数団体と「自然観察サミット」を共催
1988 年 6 月	谷中の五重塔再建へ（「上野・谷根千研究会」）
1989 年 3 月	「しのばずの池事典」発行（「江戸のある町・上野・谷根千研究会」）
1989 年 6 月	不忍池地下駐車場計画に反対運動はじまる
1990 年 7 月	谷中の住民、専門家、学生ら町育ての「谷中学校」をつくる
1991 年 4 月	アースデイ、「谷根千地区井戸水質調査」ソーラーシステム研究会と協働
1991 年 9 月	「谷根千同窓会 古写真帖 1991-1984」発行
1991 年 11 月	「わたしたちの文化財と環境」東博講堂にて。酸性雨調査研究会と協働
1992 年 4 月	「不忍池を愛する会」シンポジウム

出所：森まゆみ『「谷根千」の冒険』（2002）筑摩書房、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」年表を引用し、著者整理

3. 注目すべき論点

『谷根千』が地域ブランド「谷根千」となる過程において、いくつか注目すべき点がある。

3.1. 周囲の理解と協力

発刊当初は、地域の人たちに宗教活動や政治的活動ではないかと疑われ信用してもらえなかったが、子連れで自転車に『谷根千』を積み、販売店へ配達、集金、取材に駆け回る谷根千工房の三人の姿を見るうちに、地域の人たちが徐々に理解を示してくれ、「『この人たちは本当にこの街が好きでやっているだけなんだ』ということを、わかっていただいた」と、創刊から 10 年経った 1993 年に森まゆみ氏が振り返っている[61]。森氏はまた、周囲から、仕事なのか道楽なのかの確認を求められ、困惑する機会もあったが、「NPO と考えれば説明しやすかったのかもしれない」と述懐している[62]。

『谷根千』の販売に特に協力的であった店では、レジの側に『谷根千』が置かれ、客が会計を待つ間に買える工夫がなされていた[63]。

3.2. プライバシーの保護と情報発信のバランス

25 年続いた地域雑誌「谷中・根津・千駄木」の終刊の理由に、販売部数の減少だけでなく、2003 年に成立し 2005 年に施行された個人情報保護法がある。人の生き死にに注目し、「記憶を記録する」活動を雑誌発行の軸としてきただけに、「個人情報」の保護に敏感になった町の人たちから「話を聞くのが難しくなり、話が面白くなかったり大事なところの削除を求められたり」するようになったという変化は、編集者たちに終刊を決意させるきっかけとなった[64]。

3.3. 自治体の関わり方

谷根千工房のメンバーが、一般に開かれたお寺での祭りのポスターの掲示を区境付近の公共施設に頼んだところ、行政区が異なるという理由で断られた[20]ように、『谷根千』が対象とする地域が複数の行政区をまたぐものであったことは、行政区域内で公共サービスを行う自治体を困惑させた。

しかし、区役所同士が協力して、区境に捉われずに住民の活動を支援できる方法はあり、好例として、1989 年から 1999 年にかけて台東区と文京区が地域住民らと協力して開催した「文京・台東下町まつり」が挙げられる。1.2.5 でも言及したが、同祭りは両区による開催の終了後、それぞれの区の地元住民らが主体となり、「根津・千駄木下町まつり」（文京区）、「谷中まつり」（台東区）として開催されるようになった[40][65]。

「根津・千駄木下町まつり」の実行委員会と 2008 年頃から 10 年間連携して、大学ゼミ生らと共に祭りに参加し、調査研究を実施した東洋大学の東海林克彦教授は、商店街や町会主

催の祭りと違い、行政が主体となって始まり実行委員会形式で様々な人が関わるようになった「下町まつり」は、新旧住民の参加と交流を促す効果があるため、公共性が高いと評価する(66)。一方で、行政は派手なことを実施したがる傾向があるが、やはり地元住民あってこその地域であり観光であるため、地図製作や雑誌発行のような住民による地道な活動も大事にする必要があると話す(66)。

4. ムーブメントの起こし方への示唆

ローカルメディアを発端として、特定エリアの地域ブランドが確立されるようなムーブメントを起こす方策として、その地域の一員が、多様な地域活動とともに、読者が共感できる内容を発信することが考えられる。これは、福岡市と同様に、住民が地域に観光名所がないという認識を持っている都市においてもヒントとなり得るだろう。

4.1. 地域の一員として参画

まちづくりグループ「谷中学校」の創設メンバーの一人である手嶋尚人氏は、「町が元気であるためには、暮らしている人が自分の町にまず関心があることが大切である」と指摘し、『谷根千』によって発掘された町の魅力が人の目に触れたことで住民の町への関心が高まったと振り返る(67)。

他都市においても、特定地域の物語や記憶は、他の地域との差別化の要因となる地域固有の魅力を作るが、それらを丁寧に掘り出すには地域密着が重要となり、その地域の一員であることが役に立つ。たとえその地域に住んでいなかったとしても、地域での活動度合いや、地域住民や事業者との関わりの深さが影響するため、特定地域に活動拠点を設け、地域コミュニティに入っていくことで実現できる。

4.2. 多様な地域活動の実施

また、ムーブメントを起こすには、ローカルメディアの製作活動だけでは大きな影響を及ぼすことは難しい。2.4 で言及したように、谷根千工房による雑誌刊行以外の活動の豊富さと幅広さは著しい。編集者ら三人の地域に根ざした様々な活動は、地域内外での広いネットワークの構築と深い交流を促し、また、森まゆみ氏の作家としての活動は、『谷根千』のメディア露出の機会を増やした。

他都市においても、例えばローカルメディア製作を軸に、地域での多岐にわたる活動やイベントを仕掛けていく必要がある。活動を通じて、キーパーソンに出会ったり、ムーブメントへの影響が増幅されたりする可能性がある。

4.3. 共感できる内容の発信

そして、ローカルメディアが発信する内容への共感が、読者や地域住民に地域への愛着に気づかせ、魅力を認識することに繋がる。共感を生むには、その内容が読者や住民の関心や興味と合致する必要があり、そのためにも地域の一員であることが重要になる。そして、共感が共感を呼び、その地域の魅力に惹かれる人を増やすことができる。

5. おわりに

2009 年の『谷根千』終刊から 10 年以上経っても、「谷根千」地域では、新旧の住民や商人、住職、アーティスト、建築関係者、学生などがゆるやかに繋がりながら暮らしを楽しみ、また、そのような町に新たな担い手が引き寄せられるという、活きのいい町としての好循環がある。『谷根千』から、歴史あるものに価値があることに、人々が気付くきっかけを作ることの重要性を学んだ。今後、価値の認知が浸透していない他都市も参考に調べていきたい。

参考文献

1. 福岡市. 福岡市の観光・MICE 2021年版（福岡市観光統計）. 2021.
2. 森まゆみ. 「谷根千」の冒険. 筑摩書房; 2002.
3. 森まゆみ. 30年後の「谷根千」其の一. In: scripta winter 2017. 紀伊國屋書店; 2017. p. 6–11.
4. 森まゆみ. タテ場とヒラ場の権力. In: 路地の匂い 町の音. 旬報社; 1998. p. 101–6.
5. イースト株式会社. イースト、読書の秋に、春陽堂『明治大正文学全集』、『地域雑誌：谷中・根津・千駄木』、南雲堂『不死鳥選書』など、280点を電子復刻 [Internet]. 2022 [cited 2022 Oct 5]. Available from: https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000010.000046987.html
6. 森まゆみ. 貧楽暮らし. 集英社; 2010.
7. 編集室トライアングル. 地域雑誌 谷中・根津・千駄木 其の一. 編集室トライアングル; 1984.
8. 朝日新聞. ジョルダン・サンドさん 下町ミニコミ英語版（人きのうきょう）. 朝日新聞. 1987 Oct 26;2.
9. 東京読売新聞. ［消える街並み］（７）路地の魅力 捨てがたい便利さ（連載）. 1987 Nov 27;22.
10. 仰木ひろみ. Interview. 2022 Sep.
11. 谷根千工房. ベスト・オブ・谷根千 町のアーカイヴス. 谷根千工房, 河上進, editors. 亜紀書房; 2009.
12. 山﨑範子. 谷根千工房の代表交代のお知らせ [Internet]. 谷根千工房. 2021 [cited 2022 Sep 20]. Available from: http://www.yanesen.net/kantou_archives/2021_sep.html
13. 田中直毅. 地域自体をメディア化する「谷根千」：消費の渦の外側からの街づくり論. 毎日新聞社『週刊エコノミスト』. 1985 Oct;46–50.
14. 東京読売新聞. ＧＷは谷中・根津・千駄木で！ 市民団体が文化の集い ３０日から映画祭など. 東京読売新聞. 1989 Apr 23;27.
15. 日本経済新聞. 熱い思いを発信、雑誌にも都市論ブーム——証言集め「町」浮彫り（アーバンＮＯＷ）. 日本経済新聞. 1989 Aug 28;11（夕刊）.
16. NTT全国タウン誌フェスティバル事務局. 全国タウン誌ガイド 1985年版. 日本電信電話株式会社電話帳事業部; 1985.
17. 谷根千工房. 地域雑誌『谷中・根津・千駄木』年表（1984～2006）. In: 河上進, editor. ベスト・オブ・谷根千 町のアーカイヴス. 亜紀書房; 2009. p. 303–11.
18. トヨタ財団. トヨタ財団レポート No. 36. 1986 Apr.
19. 渡辺元. “生活術“としての市民の研究：第4回研究コンクールより. トヨタ財団「トヨタ財団レポート No. 48」. 1989 Apr.
20. 森まゆみ. 小さな雑誌で町づくり：「谷根千」の冒険. 晶文社; 1991.
21. 椎原晶子. コレクティブタウンへの道のり：谷根千のまちの20年から. 住総研『すま

いろん』. 2008;86:6–13.

22. サントリー文化財団. 谷根千工房 地域雑誌の刊行を中心に、地域の歴史と文化を掘り起こすコミュニティ活動 [Internet]. 1999 [cited 2022 Sep 19]. Available from: https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize_cca/detail/1992kt2.html

23. 岡村圭子. ローカル・メディアと都市文化：『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』から考える. ミネルヴァ書房; 2011.

24. 京成電鉄株式会社. ニュースリリース「『京成スカイライナー』ご利用“４０００万人”を 達成しました！ 」. 京成電鉄株式会社. 2022 Oct 28;

25. 京成電鉄株式会社. スカイライナー終日20分間隔で運行中！ [Internet]. 2022 [cited 2022 Oct 28]. Available from: https://www.keisei.co.jp/keisei/tetudou/skyliner/jp/index.php

26. 谷中銀座商店街振興組合理事長福島正行. 谷中銀座商店街：谷中銀座商店街のブランディング戦略～これまでの歩みとこれからの課題～. 2019.

27. 一般社団法人中小企業診断協会. 平成26年「調査・研究事業」東京都及びその周辺の商店街におけるにぎわい創出の方法および今後の課題整理報告書. 2015.

28. 理事長 福島正行. Interview. 谷中銀座商店街振興組合; 2022 Sep.

29. 森まゆみ, 荒木経惟. 夕焼けだんだん. In: 人町. 旬報社; 1999. p. 174–7.

30. 西田真二郎. 菊見煎餅総本店（東京・千駄木）――真四角、四種だけ（この店はやってます）. 日経流通新聞. 1989 Jan 21;7.

31. Ｓｔｒｅｅｔ Ｗａｔｃｈｉｎｇ－東京 谷根千－蔵、長屋、職人の世界…本物の古さが若者を魅了. 日経トレンディ. 2003 Aug;296.

32. 日本経済新聞. 路地人気、防災の壁にも モクミツは甦るか（3）. 日本経済新聞 電子版. 2011 Nov 17;

33. 日経流通新聞. 情報誌――下町の風情横文字に乗せ（消費者情報）. 日経流通新聞. 1987 Nov 3;19.

34. 桐谷逸夫. 町を愛すればこそ！. In: 谷根千工房, editor. ベスト・オブ・谷根千 町のアーカイヴス. 亜紀書房; 2009. p. 136.

35. 株式会社HAGI STUDIO「まちまち眼鏡店」店長 坪井美寿咲. Interview. 2022 Sep;

36. 出版刊行会（編）. 内山榮一・下町区長の十六年. 東京新聞出版局; 1991.

37. 台東区. 区長所信表明. 広報たいとう. 1988 Jul;(489):2.

38. 東京読売新聞. 「谷中・根津・千駄木」で秋まつり 東京下町の三地区で下町情緒を再現. 東京読売新聞. 1989 May 27;26.

39. 朝日新聞. 「下町まつり」、１０月に初登場 文京・台東区合同で 東京. 朝日新聞. 1989 May 27;

40. 住民が手作り「下町まつり」 きょうから根津・千駄木地区で／東京. 朝日新聞. 1999 Oct 23;27.

41. 台東区議会. 台東区議会 平成16年予算特別委員会会議録：3月4日-03号. 2004.

42. 南陀楼綾繁. 一箱古本市の歩きかた. 光文社; 2009.

43. 天田優里. ＴＯＫＹＯ発 不忍ブックストリート 谷根千の書店街 最新マップ完成. 東京新聞. 2020 Jun 23;24.

44. 文京・谷根千エリアのタウン誌がリニューアル [Internet]. 文京経済新聞. 2019 [cited 2022 Sep 20]. Available from: https://bunkyo.keizai.biz/headline/593/

45. 宮崎晃吉. 誰かの目線で暮らしが深まるローカルメディア「まちまち眼鏡店」をつくりたい！ [Internet]. MotionGallery：クラウドファンディング・プラットフォーム. 2022 [cited 2022 Jun 30]. Available from: https://motion-gallery.net/projects/machimegane

46. 森まゆみ. 地域雑誌「谷根千」から「新国立競技場」まで. In: 八巻和彦, editor. 日本のジャーナリズムはどう生きているか. 成文堂; 2016. p. 153–68.

47. 森まゆみ. Interview. 2022 Sep.

48. 鶴見俊輔, 森まゆみ, 那須耕介（記録・構成）. 10人の子どもたちに支えられて：対談・森まゆみ 1994. In: 鶴見俊輔書評集成3：1988-2007. みすず書房; 2007.

49. 山﨑範子. Interview. 2022 Sep.

50. 谷根千工房. 谷根千ねっと：出版物一覧 [Internet]. [cited 2022 Sep 20]. Available from: http://www.yanesen.net/books/

51. 九州大学名誉教授 藤原惠洋, 藤原馨. Interview. 2022 Oct.

52. 森まゆみ, 陣内秀信. 対談：エリアブックレット（地域雑誌）がつなぐもの：『谷根千』が見てきた町. 第一生命財団機関誌『City&Life』No 132. 2021 Aug;

53. 森まゆみ, （聞き手：編集委員　矢作弘）. 路地裏にほお寄せて（１）地域誌編集人森まゆみ氏（人間発見）. 日本経済新聞. 1996 Nov 5;5（夕刊）.

54. ジョルダン・サンド; 訳：池田真歩. 東京ヴァナキュラー：モニュメントなき都市の歴史と記憶. 新曜社; 2021.

55. 原沢政恵. タウン誌で町を再発見（東京都 谷中・根津・千駄木）. 毎日新聞社『週刊エコノミスト』. 1993 Sep;72–4.

56. 森まゆみ, 陣内秀信. 現代都市の「里という居住地」とは：みんなが共有感を持つまちを持続させる谷根千の人づきあい. 機関誌『水の文化』. 2003 Oct;(15):19–25.

57. 五十嵐泰正. 上野新論：変わりゆく街、受け継がれる気質. せりか書房; 2019.

58. 映像ドキュメント.com, 谷根千工房. 谷根千工房がやってきた！ 4/4 最終日（8月30日）～エピローグ [Internet]. 映像ドキュメント.com with 谷根千工房. 2009 [cited 2022 Sep 20]. Available from: http://yanesen.eizoudocument.com/004yattekita.html

59. 陣内秀信. 東京の都市組織を読む. In: 法政大学江戸東京研究センター, 法政大学デザイン工学部建築学科, 南カリフォルニア建築大学, トリノ工科大学, editors. 江戸東京の都市組織に挑む：上野 本郷 谷中 根津 下谷. 彰国社; 2019. p. 20–43.

60. 西原珉. アートに寛容な街、谷中・根津・千駄木. In: 江戸のある町 上野・谷根千研究会『新編・谷根千路地事典』. 住まいの図書館出版局; 1995. p. Appendix 2-13（栞）.

61. 森まゆみ. まちの個性を見つけ出す眼と心：内在するポテンシャル. In: 地域資源の発見と創造と活用と――内発型活性化の実践：開発戦略と行政のリエンジニアリング. 地域科学研究会; 1994. p. 135–42.

62. 森まゆみ. 絵入り企業の社員総会. In: 路地の匂い 町の音. 旬報社; 1998. p. 270–3.

63. 森まゆみ. 配達は社会勉強. In: 路地の匂い 町の音. 旬報社; 1998. p. 48–9.

64. Takako-Oikawa. 「ママ友」が始めて四半世紀。「谷根千」という地域雑誌がまちにもたらしたものは [Internet]. JIBUNマガジン 文京区. 2021 [cited 2022 Jun 3]. Available from: https://jibunmedia.publishers.fm/article/24696/

65. 台東区議会. 台東区議会 平成26年9月文化・観光特別委員会会議録. 2014.

66. 東洋大学 教授 副学長 東海林克彦. Interview. 2022 Sep.

67. 手嶋尚人. つながりのある町. In: 矢作弘, 小泉秀樹, editors. 成長主義を超えて：大都市はいま. 日本経済評論社; 2005. p. 157–71.

謝辞

本調査を進めるにあたり、谷根千工房 代表 川原温様、同 仰木ひろみ様、同 森まゆみ様、同 山﨑範子様、九州大学名誉教授 藤原惠洋先生、藤原馨様、谷中銀座商店街振興組合 理事長 福島様、（株）HAGI STUDIO「まちまち眼鏡店」店長 坪井様、東洋大学教授 東海林先生、文京区アカデミー推進課、台東区観光課の皆様にインタビューにご協力いただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。また、友人 Rika との縁で藤原先生にいただいた谷根千工房の皆様と東京大学大学院 高口葵様とのご縁と心温まる交流の機会に心より感謝申し上げます。入手困難な過去の情報の捜索に共に一喜一憂してくれた、弊所 松熊常務理事、同 都市政策資料室 本田司書にも深謝申し上げます。最後に、『谷根千』を知るきっかけとなった、福岡市博多区冷泉町、店屋町、御供所町、上呉服町のまち歩き地図『冷店御まち歩き地圖』を共に製作したレイテンゴ・プロジェクトチームの仲間に心より感謝します。

2022 年度個別研究「ローカル地図製作等による地域の魅力再認識の可能性」報告書
『谷根千』から学ぶ地域ブランドの作り方

2023 年 3 月 31 日 第 1 版発行
著者 山田 美里
発行 公益財団法人 福岡アジア都市研究所（URC）
〒812-0011 福岡県福岡市博多区博多駅前 2 丁目 8 − 1
TEL) 092-710-6431　FAX) 092-710-6433
E-mail) info@urc.or.jp　WEB) https://urc.or.jp/

■免責事項
本書は、できる限り正確な情報を掲載しておりますが、その全てを保障するものではありません。
本書利用により生じたいかなる損害において一切責任を負いません。

■著作権
本書のコンテンツについては、リンク先情報、提供元が記載されている画像等を除き、（公財）福岡アジア都市研究所が著作権を所有します。本書を引用される際は、出典名を「（公財）福岡アジア都市研究所（URC)」と明示してください。なお、当研究所に著作権が帰属しないコンテンツの引用については、別途、提供元の許諾を得る必要があります。

Copyright © 2023 The Fukuoka Asian Urban Research Center. All Rights Reserved.